OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	いま、民俗学者・宮本常一の足跡をたどるということ : 2017年度「日本学方法論の会」参加記
Author(s)	猪岡, 叶英
Citation	日本学報. 2018, 37, p. 31-34
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/71620
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【特集】

いま、民俗学者・宮本常一の足跡をたどるということ

2017年度「日本学方法論の会」参加記

猪岡　叶英

2017年度の日本学方法論の会は、歴史学者の木村哲也さんをお迎えし、そこで民俗学者・宮本常一の足跡をたどることで見えてくる体験的フィールドワークの魅力と可能性について熱い議論が交わされた。

木村さんは、神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科のご出身で、歴史学と民俗学の間を領域横断的に学ばれてきた方である。2006年には、宮本常一の代表的著作である『忘れられた日本人』（初版：未來社1960年）の関係者らからの聞き書きを中心にまとめられた『「忘れられた日本人」の舞台を旅する』（河出書房新社）を上梓されている。宮本常一に関する研究に留まらず、その研究対象は日本の地域医療を支えてきた駐在保健婦を扱われた『駐在保健婦の時代　1942-1997』(医学書院2012年)、詩人・大江満雄（1906-1991）とハンセン病療養所に暮らす人びととの詩を介した共闘を扱われた『来者の群像　大江満雄とハンセン病療養所の詩人たち』（編集室水平社2017年）等、多岐にわたっているが、いずれも戦後の日本の地域社会のなかで、これまでその存在に光が当てられることが少なかった人びとの声をご自身の足で歩いて丹念に聞いてこられた。

方法論の会の当日の流れはおおよそ以下の通りであった。

はじめに北村毅先生から学部の3～4年を対象としたゼミで『忘れられた日本人』を読んでいること、このテクストが激動の時代を生きた若者の記録として読める点や木村さんとの学問的つながりなど講演者として木村さんを呼ばれた経緯が説明された。講演では、まず、木村さんが歴史学と民俗学の間で考えるようになった学問的背景や大学の制度の外でどのような影響を受けたのかをうかがった。それを踏まえた上で、主に宮本常一の生誕110年を記念して木村さんが『人間学工房』でWeb連載されていた「宮本常一伝ノート」（2017年4月1日～同年12月15日）の内容に基づき、宮本の足跡をたどることで見えてくる宮本自身の問題関心や聞き書き姿勢、宮本に影響を受けた若者たちによる地域振興の取り組み、宮本が歩き見たであろう土地と出会った人々が経験した近現代の変化などのお話をしていただいた。質疑応答（講演記録では未収録）では、講演内容の質問に加え、大学

の制度の内外にとらわれず研究を続けていくための方法論を問う質問もあった。

今回の方法論の会における木村さんのお話を聞いて、会場の参加者の多くが様々な問題関心を持ったことと考える。特に、当日の参加者の半数は、ゼミで『忘れられた日本人』を講読している学部の3～4年生ということであった。本来なら、彼ら彼女らがどのような感想や疑問を持ったのかが望まれるところかもしれないが、ここからは、一参加者としての立場から私自身が今回の方法論の会を通じて感じたことを記すこととしたい。

私は、現在、博士後期課程に在籍し、民俗学を専攻しているが、宮本常一という民俗学者の存在自体を知ったのは、高校生の頃だった。当時、私の通っていた高校の図書館には、『別冊太陽』が購読対象の雑誌として毎号置かれていていた。たまたま手に取った一冊が宮本常一の生誕100周年を記念して特集された『宮本常一 「忘れられた日本人」を訪ねて』（別冊太陽148、平凡社2007年）であった。特集号の表紙は船上の宮本を写したもので、にこやかな表情の宮本が印象的だった。宮本がフィールドワークの途上で撮影した大量の写真やフィールドノートの一部などが掲載され、彼が日本のどこを歩いたのかが視覚的によくわかるものだった。

その後、大学生となってから『忘れられた日本人』を読み、近代の日本という時空間のなかで地域間を移動する様々な人びとが語るオーラルヒストリーやライフヒストリーに関心を持ち、その豊かな民俗的世界に出会いたいと感じた。このことが、私が民俗学に関心をもったきっかけであり、現在も大学院等で調査研究を進める上での原動力ともなっている。

一方で、『忘れられた日本人』に描かれた地域社会とそこに生きる人びとの歴史はどこか一歩離れた距離にあり、自分自身に連なるものとしてとらえることが難しいとも感じたことを覚えている。それは、宮本が聞き取りを行った人物の多くが幕末や明治の終りに生まれた人びとであり、アジア太平洋戦争後の高度経済成長を経て地方から都市への人口の流出による地縁的・血縁的つながりの希薄化が進むなかで、宮本が行ったような聞き取りは難しいのではないかと感じたからである。

しかし、今回の木村さんのお話をうかがうなかで、『忘れられた日本人』というテクストは「生きた」テクストであり、そこに描かれた土地の風景や人々は過去のものではなく、自分の足で旅することで巡り合うことができる対象へと近づいたように感じた。

私が、以上のように感じた背景として、宮本常一を直接知る関係者に話を聞くことが年々難しくなるなかで、木村さんが宮本の書いたテクスト分析に留まらず、宮本の生きた時代と現在をつなぐアプローチをとられている点が挙げられる。それは、Web連載「宮本常一伝ノート」（『人間学工房』）の「エピローグ　歴史の塗り替え　－なぜ旅をするのか？」（2017年12月15日更新）で示されている以下の方法である。

1、空襲で焼失した戦前の調査ノートの空白を埋める。
2、調査ノートと作品を比較する。
3、宮本が歩かなかった土地から考える。
4、写真を模写する。
5、宮本が影響を受けた、若い仲間たちの取り組みに焦点を当てる。
6、一巡する旅から見えてくる時空に思いをめぐらす。

これは、「宮本が訪れた場所」、「宮本が書いた」、「宮本の影響を受けた人」と語ることによってのみ結ばれる従来の宮本常一像の新たな読み直しであり、あるく・みる・きくという宮本自身の実践を継承されてきた木村さんならではの方法と考える。例えば、「2、調査ノートと作品を比較する」と複数の話者への聞き取りが重ね合わされ、一人の物語として作品化されている場合があることが解り、「4、写真を模写する」では、宮本が撮影した同じ場所に立つことにより景観の変化（道が広がり町ができていく様子など）を感じ取ることができるという。

私が、特に関心を持ったのは、「5、宮本が影響を受けた、若い仲間たちの取り組みに焦点を当てる」という方法である。

5で示されている、「若い仲間たち」は研究者だけでなく多様な立場から地域社会の発展のために尽力した人びとのことを指していると考える。宮本との会話、講演やテクストを通じて、多くの若い仲間たちが、港湾機能の充実、町並みの保存や活用、過疎化など地域が抱える問題を共有したことを意味している。地域の課題に個人やグループとしてどう取り組んだのかという運動体に着目した視点であり、現在、地域振興に取り組む人々の参照軸になると感じた。そして、これは宮本の場合に限らず、その他の民俗学者をはじめとしたフィールドワークを伴う研究者の足跡を後進の研究者が引き継ごうとする場合に、その周囲への目配りを促すものでもある。フィールドワークに基づく調査研究等は、成果物となって日の目を見る段階ではじめて認識される場合がほとんどであり、話者、話者を紹介した人、話を聞かれたが取り上げられなかった人々など多様な主体が関わっていることが見落とされがちなのではないかと考えるからである。

以上に加えて、私が木村さんのお話のなかで印象に残っているのは、「音」の記憶は残りにくく、旅をしていくと聞いたことがつながる場合がある、という2点である。

「音」の記録は残りにくいという点に関して、木村さんは、ホラ貝が吹かれる長さによって村の話し合い（寄り合い）の種類が違っていたというお話をされた。「音」をどう記録するかは、日本各地のお祭りや行事等の報告書を執筆するなかで民俗学者が直面する問題

ではないかと考える。例えば、ある祭礼行事のなかで単に「太鼓を叩く」と記述するだけでは、正確ではない。誰がどのような目的で太鼓を叩いたのか、その音が周囲の人々にとってどのような意味を持つのかを考えてみる必要がある。すなわち、音による伝達があるということは、その地域の人びとが共有している一つの民俗的な知識であり、「音」による伝達がなくなるということは、一つの民俗的な知識が消えたことを意味している。

また、旅をしていくと聞いたことがつながる場合があるというお話では、サンゴ漁やカツオ漁が行われる地域で似た言葉が使われているという事例を示された。これは、いわゆる民俗語彙（フォークターム）が人の移動に伴って伝わっていくことを示していると思われる。このような実感を得るためには、数多くのフィールドワークによる裏付けが必要であり、そこで話される言葉に対して聞き手が常に敏感でいることが求められる。これは、聞き手がどう話者の話を受け止めるのかという問題ともつながっているように感じた。

以上、取り留めない感想を記してきたが、今年度の「日本学方法論の会」を通じて、会場の多くの人々が、宮本常一の『忘れられた日本人』が生きたテクストであり、フィールドのなかで宮本の姿勢や見方を感じ取るおもしろさや楽しさを感じたのではないだろうか。